

日本学術会議公開シンポジウム
翼がつなぐ世界ー鳥と人の歴史・生態・未来ー

野生復帰を軸にした 人とコウノトリの関係性の再構築

害鳥 瑞鳥 保護鳥

「ただの鳥」あるいは「ただならぬ鳥」か

2026/7/12
金沢大学
菊地 直樹

1

コウノトリ野生復帰



田の草時分になるちゅうと、わしらが学校から帰って昼飯食って休む時分ですけども、その時分になると村の人は仕事からみんな帰って昼飯食いに帰ったただ。その暑い最中に、もう田の中に入ってそのシャツ裸であのもんですわ。あちこちに田の草をとっとる人があるようにある。

ほう、この暑いのに、まだ昼せんと何きばっとんなるんだらうと、見行くちゅうと、そうじゃない。あのツルが田んぼの中歩いてほていこう餌を探して歩いとるのが、ちょうどあの半分上が白だもんですでえ。シャツ裸で田の草取っとるように見えるんですわあ(豊岡市男性 1918年生)。

里の鳥 コウノトリ

保護 1955年

捕獲 1965年

絶滅 1971年

- ・狩猟による個体群の縮小
- ・営巣地の減少
- ・水田など生息環境の改変
- ・農薬の影響
- ・遺伝的多様性の減少

人工繁殖 1989年

郷公園開園 1999年

野外放鳥 2005年

再び里の鳥へ

害鳥、瑞鳥、ただの鳥

「大事な鳥だなんて思いどころじゃなかった。ボウてボウて、ボウのに。見たいたらボウて。・・・そんなに値打ちのある鳥どこでなかった。」(豊岡市90代女性)

人と自然の関係性の変容



ともに暮らす地域づくり

地域と行政と研究者の協働

虫の目

シンボル
暮らしの場
生業



鳥の目

希少種
生息地
科学

2005年の試験放鳥以降、日本でヒナが生まれ育ったことのある場所は下の図の白枠で示した、
 兵庫県7か所、京都府2か所、鳥取県4か所、福井県6か所、石川県4か所、茨城県4か所、島根県2か所、千葉県
 野田市、栃木県小山市、徳島県鳴門市、香川県まんのう町、広島県世羅町、新潟県上越市、佐賀県白石町の36
 か所です。(2025年12月末現在)

その中で飼育コウノトリを放鳥した場所は、兵庫県豊岡市、兵庫県養父市、兵庫県朝来市、福井県越前市、千葉
 県野田市の5か所です。



放鳥以降の主な出来事(2005-2026)

- 2005 放鳥
- 2007 野外での巣立ち
- 2007 コウノトリ湿地ネット設立
- 2011 野生復帰グランドデザイン公表
- 2012 京丹後市でヒナ孵化（県外初）
- 2013 個体群管理の機関間パネル設立
- 2014 巣立ち個体が初めて韓国へ飛来
- 2015 韓国で放鳥開始
- 2015 福井県で放鳥開始
- 2016 日本コウノトリの会設立
- 2017 鳴門市・雲南市でヒナ誕生（盆地外初）
- 2017 野外の個体数100羽に到達
- 2018 コウノトリ市民科学運用開始
- 2019 巣立ち個体が初めて中国へ飛来
- 2020 野外の個体数200羽に到達
- 2025 韓国に人工巣棟設置
- 2026 野外の個体数500羽に到達
- 2026 絶滅危惧種IAからIBへランクダウン
- 2026 台湾での人工巣棟設置準備

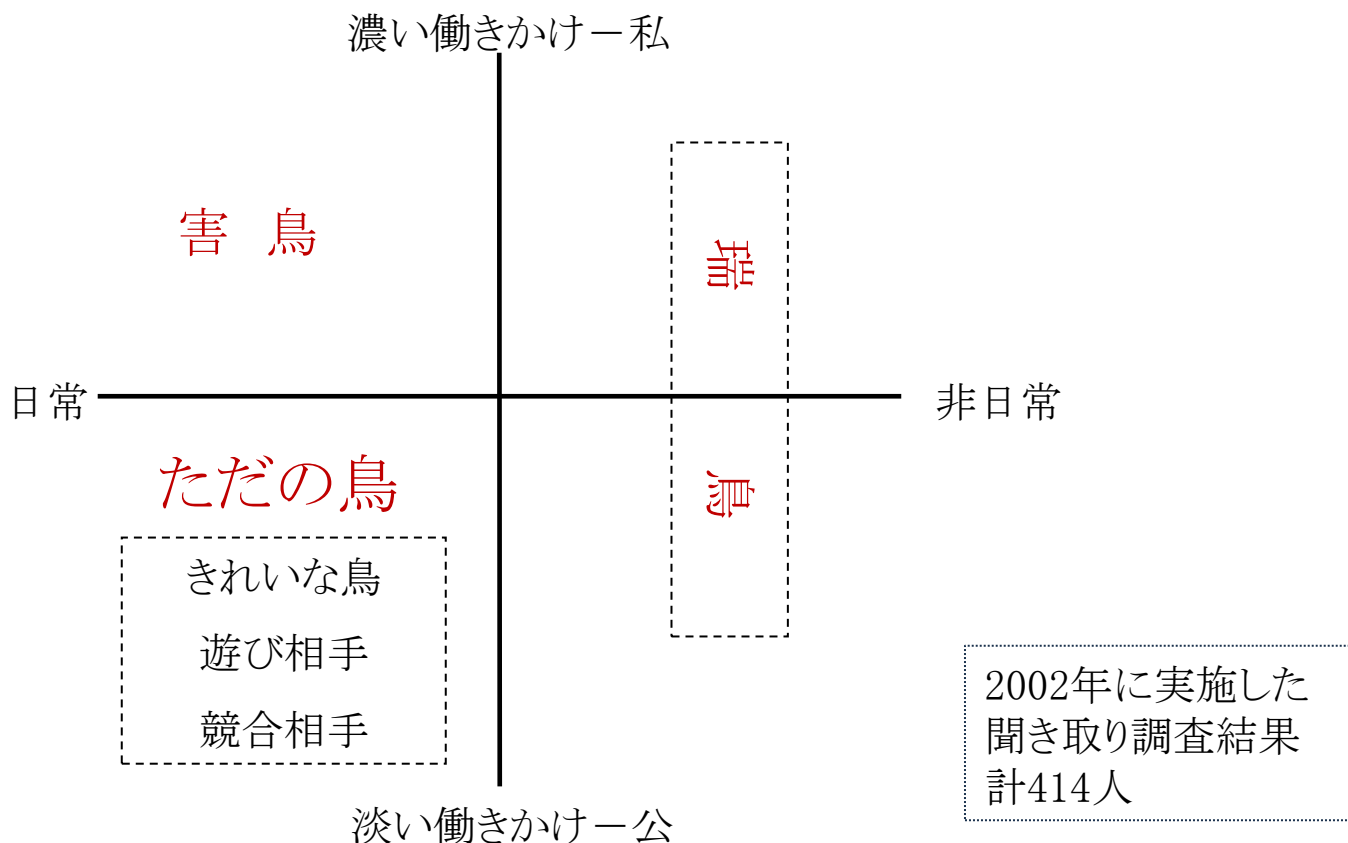
2

豊岡におけるかかわりの変容

コウノトリがかつて生息していた地域社会の自然環境と文化を総体として保全・創造し、今後コウノトリも棲める地域社会のあり方を模索する試みの総体

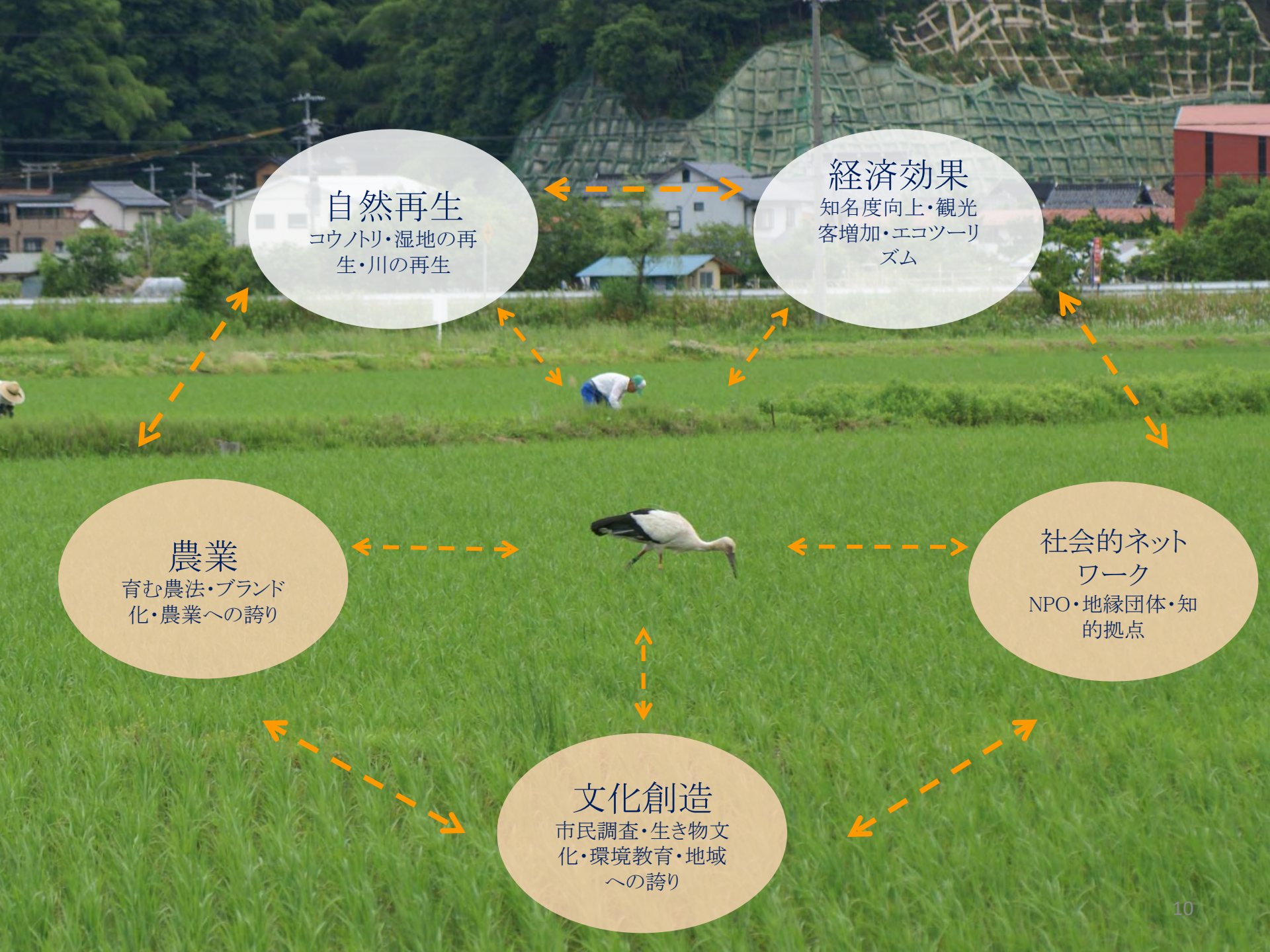


多元的存在としてのコウノトリ



同じ地域の構成員になれば、さまざまな感情が生じてくる。それでも、地域としてはコウノトリを選択し、生活の中に取り込まれていれば、それはそれで、異質な価値が共存しうる「**コウノトリと共に暮らす地域社会**」といえるだろう。**コウノトリを媒介に、異質な人びとや価値が相互作用し、相互変容することから、コウノトリも棲める地域文化が創出される**のだ。私たちに求められているのは、同じ時空を生きるものとしてのコウノトリという矛盾と折り合う知恵と感性の復活ではないか。

菊地直樹(2006)『蘇るコウノトリ―野生復帰から地域再生へ』東京大学出版会



自然再生

コウノトリ・湿地の再生
・川の再生

経済効果

知名度向上・観光客増加・エコツーリズム

農業

育む農法・ブランド化・農業への誇り

社会的ネットワーク

NPO・地縁団体・知的拠点

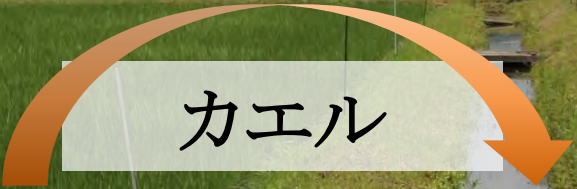
文化創造

市民調査・生き物文化・環境教育・地域への誇り

コウノトリ育む農法

おたまじゃくしが干上がって死んでしまう

これまで私が見ていたのは田んぼにカエルやフナゴが干からびて、死んでいるのが当たり前の風景。その当たり前だと思っていた風景をこりゃいかんというのが育む農法だから、共感できる。せっかくカエルになるまでは田んぼで育ててやろうじゃないかと

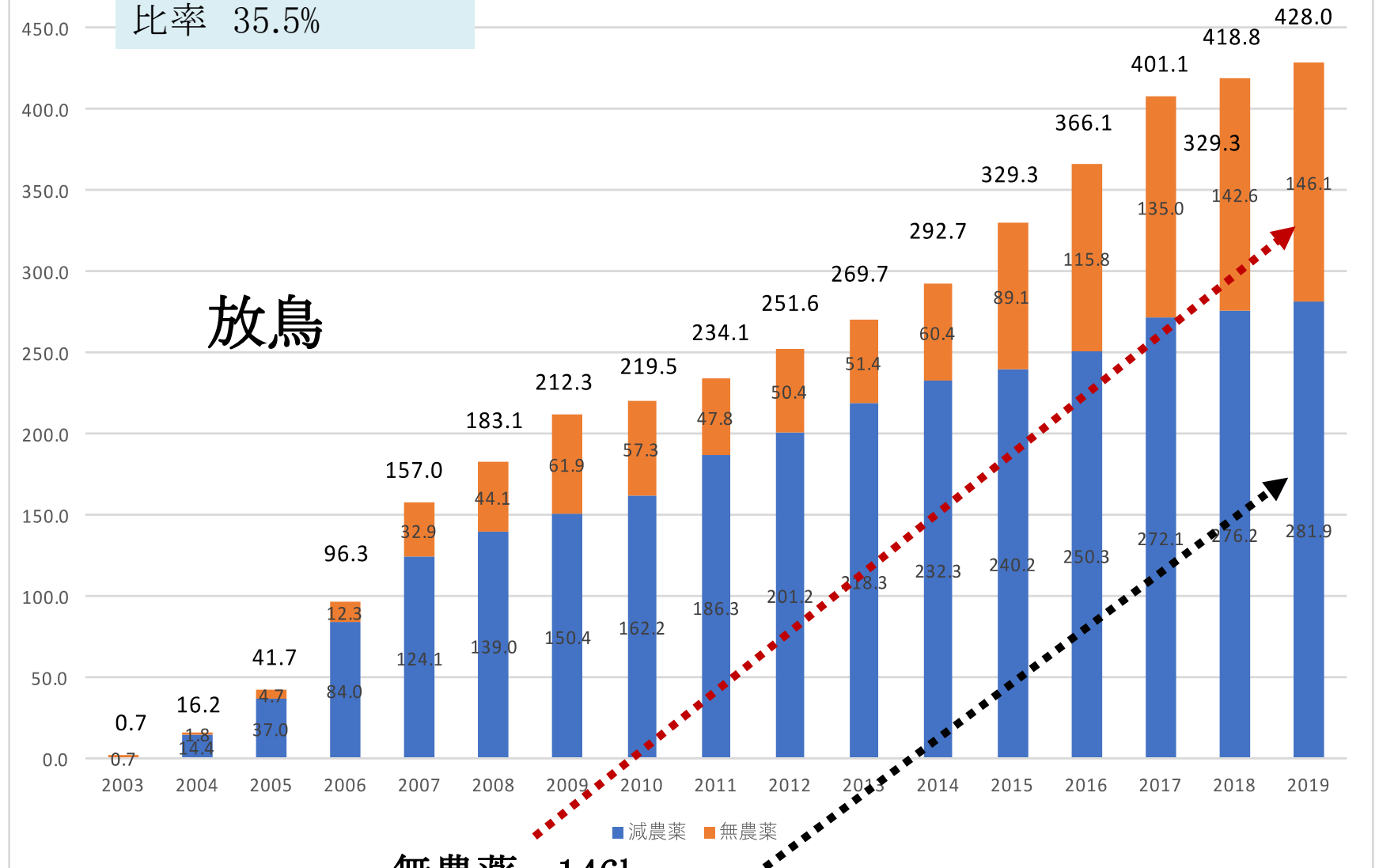


カエル

避難場所

環境創造型農業作
付面積(水稻)
比率 35.5%

コウノトリ育む農法栽培面積の推移



無農薬

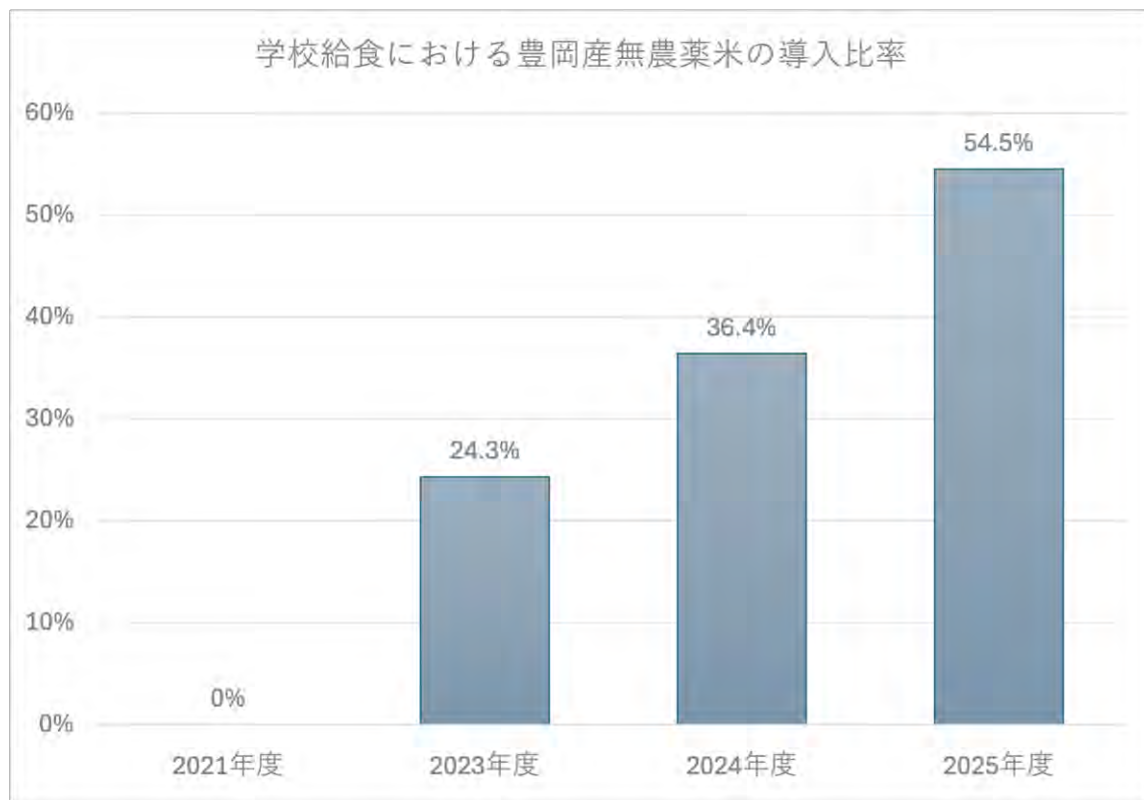
146ha

減農薬

282ha

提供: 豊岡市コウノトリ共生部

学校給食における豊岡産無農薬米の導入比率

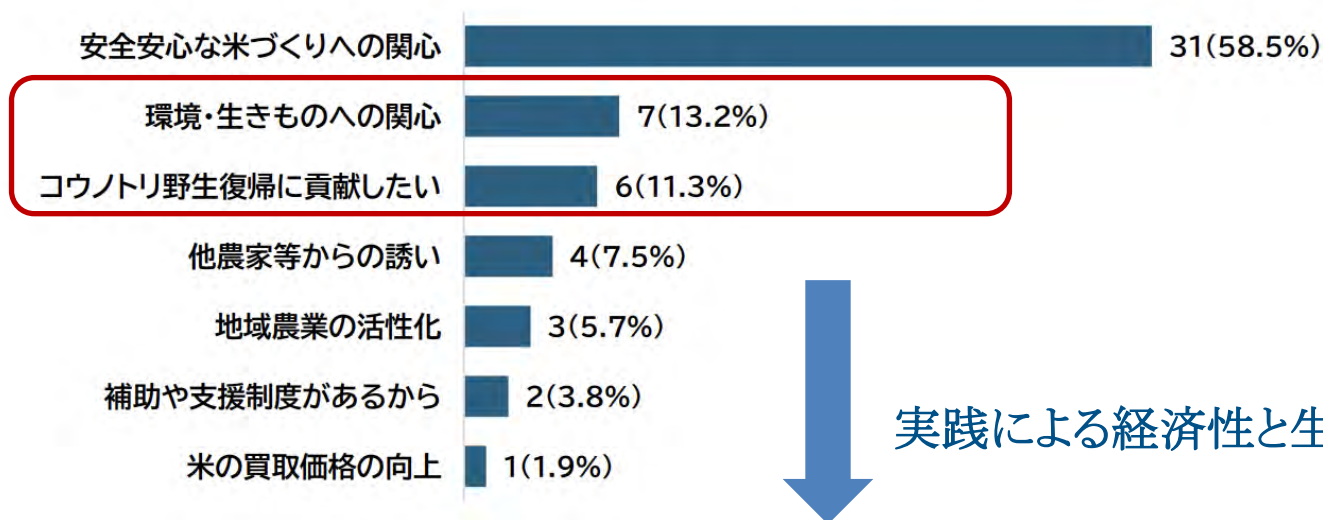


豊岡市生物多様性推進部会資料(2026)を元に作成

コウノトリ育む農法の拡大は、環境運動から地域独自の食農教育・ライフスタイルへと定着しつつあります。豊岡産の無農薬米の学校給食導入比率は急速な伸びを見せています。

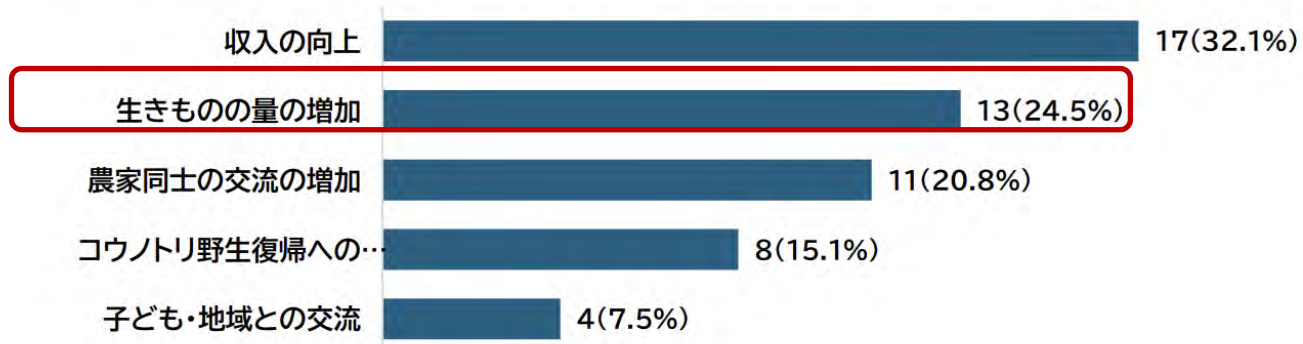
参加による「生きものへのまなざし」の醸成

(1) 育む農法に参加したきっかけはなんですか。(最も大きいものを一つ選択)

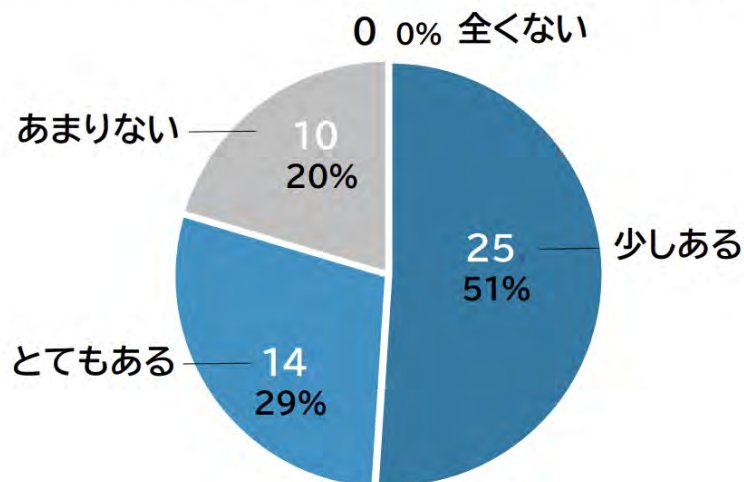


実践による経済性と生態系実感の同居

(2) 育む農法にどのようなやりがいを感じていますか。(最も大きいものを一つ選択)



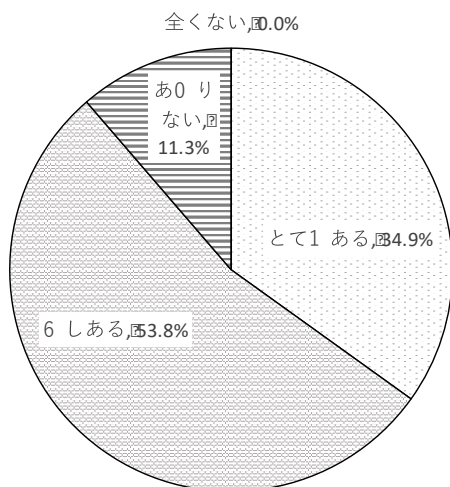
(3) 育む農法のほ場で生きものが増えたという実感はありますか。(一つ選択)



※未回答4

図7 生きものが増えたという実感

N=106



	今の田んぼで見かけた生き物	昔の田んぼで見かけた生き物
両生類 カエル系	カエル 14 トノサマガエル 7 オタマジャクシ 4 アカガエル 4 ツチガエル 2 アマガエル 1 ヌマガエル 1 ヤマアカガエル 1 ウシガエル 1	カエル 6
昆虫類 トンボ以外	クモ 7 イナゴ 5 バッタ 4 タイコウチ 2 ユスリカ 2 ホタル 2 虫 2 タモロコ 1 カマキリ 1 カメムシ 1 マツモムシ 1 ホタルの幼虫 1	バッタ 2 タガメ 1

豊岡市民にとってのコウノトリの生息理由

表9. 市内での生息希望と「生息してほしい」理由、及びこれからも市内でコウノトリが生息するために何かする意思の有無と「何かする」内容。

	選択肢	郵送回収		Web 回収	
		人数	(%)	人数	(%)
生息希望	生息してほしい	433	(82.2)	272	(79.8)
	生息してもらいたくない	0	(0.0)	6	(1.8)
	どちらでもいい	83	(15.7)	53	(15.5)
	関心がない	11	(2.1)	10	(2.9)
	回答者数	527	(100.0)	341	(100.0)
生息してほしい理由	豊岡市の誇り／象徴／シンボルとなるから	137	(31.6)	95	(34.9)
	自然環境が豊かであることを示すから	120	(27.7)	73	(26.8)
	もともとコウノトリが生息していたから	82	(18.9)	54	(19.9)
	コウノトリが見たいから	48	(11.1)	26	(9.6)
	豊岡市の活性化につながるから	34	(7.9)	19	(7.0)
	経済効果を生み出すから	9	(2.1)	3	(1.1)
	その他	3	(0.7)	2	(0.7)
	回答者数	433	(100.0)	272	(100.0)
意思の有無	意思あり	330	(62.7)	156	(45.7)
	意思なし	196	(37.3)	185	(54.3)
	回答者数	526	(100.0)	341	(100.0)
「何かする」内容*	コウノトリを大事に思うようにする	167	(50.6)	95	(60.9)
	環境に配慮した生活を実践する（ごみ減量、省エネ等）	162	(49.1)	106	(67.9)
	農薬をできるだけ使わない／農薬をできるだけ使っていない作物を買う	80	(24.2)	37	(23.7)
	コウノトリを活かした経済活動に協力する（コウノトリ関連商品の販売・購入等）	54	(16.4)	36	(23.1)
	コウノトリの生息地づくりに協力する（田んぼ・湿地・里山等）	41	(12.4)	30	(19.2)
	その他	11	(3.3)	3	(1.9)
	回答者数	330	(—)	156	(—)

* 複数回答含む

野生復帰への肯定的評価:75%

生息してほしい:約80%

地域のシンボル:30%強
自然環境の豊かさ:27%

経済効果の創出:2%

本田裕子(2025)「放鳥20年を迎えたコウノトリの野生復帰事業に対する豊岡市民の受容と今後の展望」『野生復帰』14

未来の豊岡市

表 11. 未来の豊岡市のコウノトリの生息数と捉え方.

		郵送回収		Web 回収	
選択肢		人数	(%)	人数	(%)
生息数	増えている	242	(47.7)	190	(55.7)
	現状の数を維持している	156	(30.8)	89	(26.1)
	減っている	6	(1.2)	6	(1.8)
	わからない	103	(20.3)	56	(16.4)
	回答者数	507	(100.0)	341	(100.0)
コウノトリの捉え方*	まちづくりの観点から「地域のシンボル」になっている	290	(57.3)	196	(57.5)
	自然環境の豊かさを示す指標とみなされている	166	(32.8)	109	(32.0)
	豊岡市の歴史・文化・自然を学ぶ題材・教材になっている	156	(30.8)	86	(25.2)
	他の野鳥と変わらない「普通の鳥」になっている	94	(18.6)	56	(16.4)
	保護活動により引き続き「希少な鳥」と扱われている	86	(17.0)	49	(14.4)
	わからない	37	(7.3)	22	(6.5)
	コウノトリによる農業被害等により「害鳥」となっている	10	(2.0)	3	(0.9)
	その他	2	(0.4)	2	(0.6)
回答者数		506	(—)	341	(—)

* 複数回答含む

- ・コウノトリが増えている:約50%
- ・地域のシンボルとなっている:57%
- ・「普通の鳥」になっている:17%
- ・「希少な鳥」として扱われている:15%

コウノトリ観光

コウノトリの存在が「日常の風景」へと移行(ただの鳥化)する一方で、非日常の価値に依存してきた「観光資源としての魅力」は薄れている

観光資源として高評価



来館者数の激減

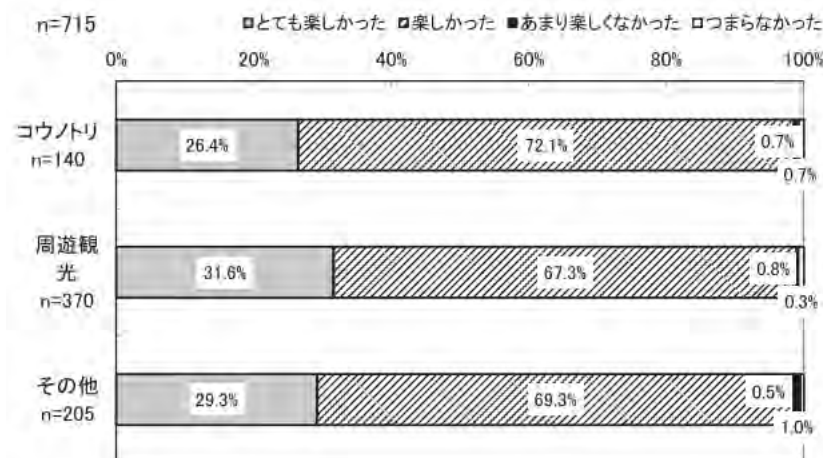
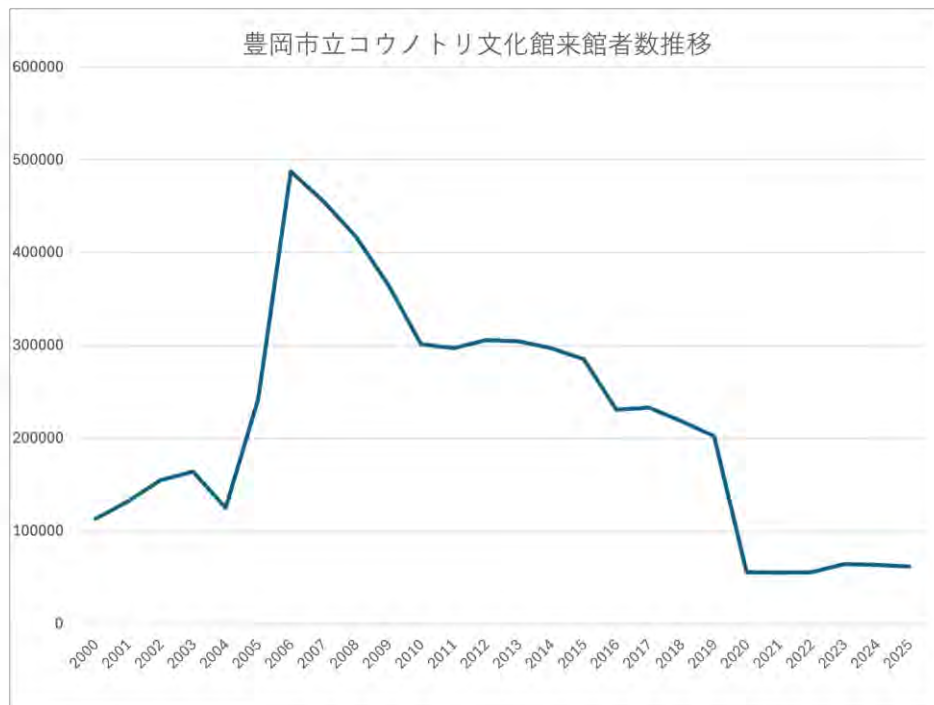


Fig.8 観光目的別の満足度

The level of visitors' satisfaction in different tourist purposes

- ・ほぼ100%が満足
- ・90%近くがリピーター志向



菊地直樹(2011)「野生復帰によるコウノトリの資源化とその課題」『湿地研究』2

豊岡市提供の資料から作成

コウノトリの日常化

- ・生息数500超(1000羽時代へ)
 - ・国内各地に飛来
 - ・営巣する自治体数は36
- ・絶滅危惧種IAからIBへランクダウン
 - ・地域のシンボル
 - ・自然環境の豊かさ

害鳥から
保護鳥へ
そして
ただの鳥へ？

- ・生きものへのまなざしの醸成
- ・害鳥意識はほぼない
- ・コウノトリ育む農法の伸び悩み
- ・担い手の高齢化・不足

- ・観光資源としての魅力の低下
- ・地域住民のリピート率の低下
- ・経済効果への期待の低さ
- ・学校給食への導入

3

かかわりとしての市民科学

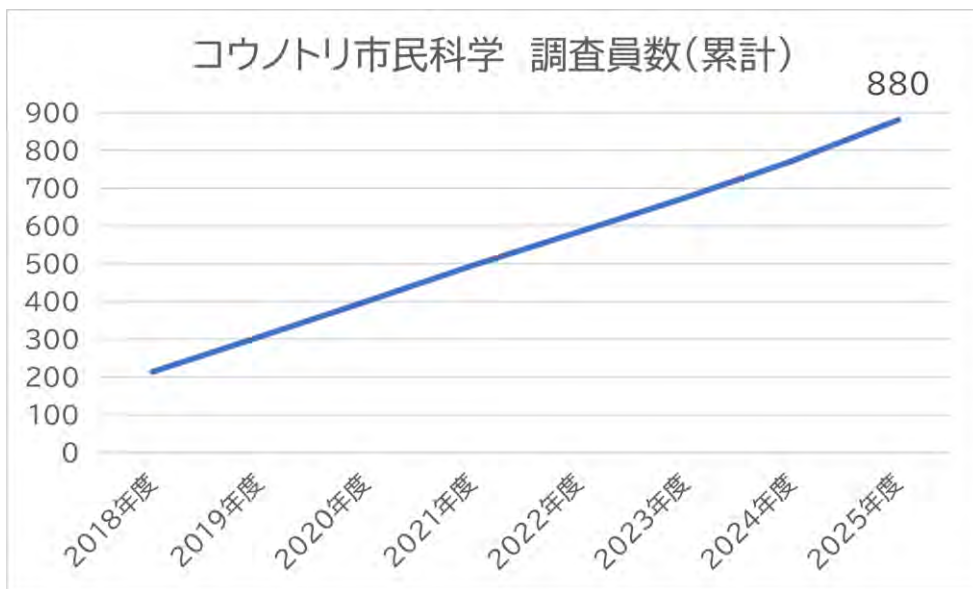
－仮説的考察－

コウノトリ市民科学

- ・日本コウノトリの会と東京大学・中央大学による共同運営
- ・2018年に運用開始
- ・コウノトリという一つの種に特化、個体を対象
- ・国内外の市民が専用アプリを通じて目的情報や行動記録を入力
- ・将来にわたって利用可能なオープンデータ
- ・市民による行動観察記録を幅広く収集するシステムの構築
- ・市民団体と市民、研究者、自治体(豊岡市)が連携し、ICTを介して形成された広範なネットワーク

- ①市民参加型の市民科学:研究者や行政などの依頼により市民がデータや情報の収集のみに参加する
- ②協働型の市民科学:市民が科学研究の多くのプロセスにかかわる
- ③共創型の市民科学:市民が多様な組織と連携し、すべての科学研究のプロセスに主体的にかかわる

コウノトリ市民科学の広がり



- 7回の市民交流会開催
- コウノトリ市民科学勉強会
- 関東地域の今後を考える会
- 各地の人工巣棟の設置支援

石川県河北潟(2021.3.10)



市民交流会



韓国・台湾のと市民交流(人工巣棟の設置)

コウノトリ盛り上がり協力隊



かかわりとしての市民科学：仮説的考察

①新たなかかわりを形成するプラットフォームか

- ・ICTだけではなく対面での交流の重視
- ・コウノトリを介して国内外の人びとがつながる回路を形成

②共創的知を構築するか？

- ・単にデータを集める「①参加型」から、国内外の多様な主体を繋ぎ、地域独自の知を編み出す「③共創型」へとコウノトリ市民科学が深化していくのか？

③コウノトリと共に暮らす地域づくりにつながるか？

- ・個体レベルの関心から、コウノトリが生息する地域(田んぼ、里山、地域社会という社会－生態システム)にまなざしが拡張しているか？
- ・「場としてのコウノトリ」(佐竹2026)へ

4

おわりに

「ただの鳥」と「ただならぬ鳥」

コウノトリを媒介に、異質な人びとや価値が相互作用し、相互変容することから、コウノトリも棲める地域文化が創出される(菊地2006)

ただの鳥？

- ・日常化したコウノトリ
- ・新たな活動・政策の困難さ
- ・地域のシンボルとして機能

ただならぬ鳥？

- ・非日常としての飛来
 - ・ハレと腫物
- ・課題(本田2024)
人材、予算、対策...

継ぎ手としての市民科学

個体・種としてのコウノトリから
地域としてのコウノトリへ